

講演要旨

「おタキの手紙から見た娘イネー未公開の二つの史料からー」

石山禎一

はじめに

おイネが初めて伊予国卯之町を訪れたのは、この度発見の「おタキの手紙（1845年2月：弘化2年）」から数えて、今年で171年目、シーボルト没後150年に当たる。宇和文化の里の堀内統括館長からの依頼があり、イネが卯之町に来た裏付けを調べた。

楠本タキ、イネに関する研究は、呉博士や古賀博士の研究¹を基本とし、その後、研究者や郷土史家によって広く知られるようになった。近年は、研究書・論文のほか、小説、漫画、テレビ等タキやイネを紹介するものは87件²に及び有名になったが、シーボルトとお滝、おイネの関係を知る必要な史料は決して十分ではない。

I. 新史料発見の経緯

新史料発見にはかなりの時間を要した。国内ではわからず、海外に散在する資料の中で、ドイツのボッフム・ルール大学東アジア学部附属図書館所蔵「シーボルト関係諸資料」356点と、シーボルトの末裔ブランデンシュタイン家所蔵「シーボルト関係文書」14,050点の史料を調査した。その結果、ブランデンシュタイン家所蔵文書中に、おタキの口述をもとにした日本文をオランダ通詞³や三瀬周三（諸淵）が蘭訳（代訳）した手紙2点（5枚）が含まれていることがわかった。

1点は、(1)お滝が38歳の1845年に「出島からシーボルト宛に送った手紙」で、オランダ通詞名村貞四郎（のち9代目名村八右衛門）が蘭訳したものである。もう1点は(2)1860年頃、三瀬周三（当時21歳）が蘭訳した「オタキサ？のシーボルト宛手紙」である。残念ながら日本文の手紙は前半と後半部分が切れており、蘭文訳の方は前半部分はあるが、後半部分が切れている。

II. 新史料「2つの手紙の内容」と検討・分析

1) おイネが初めて伊予国卯之町を訪れた時期

最初の手紙の日付は、「出島にて、1845年11月1日」とあり、最後に“Sono ooki”と書かれてあるから、この署名は「おタキ」すなわち「其扇」が書いたものではなく、書体から見て通詞の名村貞四郎が書いたものであるとわかる。

手紙の中ほどに、「この1845年2月におイネは伊予国へ一人で旅たちました」とあり、「その国はあなた様の門人二宮敬作がおりますので、あなた様の学問的講義（一般医学）

¹ 呉秀三 1924『シーボルト先生其生涯及功業』吐鳳堂、古賀十二郎 1963『丸山遊女と唐紅毛人』長崎文献社

² 2015年12月31日現在。

³ 通訳。

を求めて（修行に）出かけたのでございます。（おイネは敬作に会うと）まるであなた様を尊敬しているかのように、非常に気に入って喜んでいます。そしてさらにあなた様の学問的講義（産科医学）を深く学びたいと備前国のあなた様の他の門人（石井宗謙）に会いに行き、彼の許で確か60日滞在し（修行している）と記憶しております」とある。イネが伊予国の二宮敬作を頼って卯之町に来た年月は、1845年2月と明記されており、この年月に訪れたことは間違いないだろう。当時、其扇は38歳、おイネは18歳、敬作は41歳ということになる。

おイネが卯之町に初めて訪れたという年月は、これまで小説を含む多くの著書や伝承などで諸説あり、その年齢については、12、14、18、19歳などまちまちだった。理由として1次資料に乏しいことが指摘されている。一例として、呉秀三著『シーボルト先生其生涯及功業（前掲）』では、「年19の時、母に請ふて伊豫に至り、二宮敬作方に寄寓す」とある。また、おイネ57歳の自筆『履歴明細書』には、伊予国にいつ来て、敬作の許で医学を学んだということが省かれていて、その年月すらわかっていない。こうしたことから、今回紹介する手紙は、まさに従来の諸説を否定する貴重な1次資料であると言ってよい。

2) 少女時代のイネの性格と教育

(2)の書簡には、「おイネははや6、7歳になりましたが、心根は男々しく、また遊びも男の子のようで、仮にも女の子の遊びに夢中になることはありませんでした。」とあり、幼少ころのおイネは男勝りで、明朗快活であったようだ。

(1)と(2)の書簡から、「6、7歳より13歳まで女の身で不束ながら様々な芸の稽古に通わせました。書道や三味線、その後裁縫を習得しました。それは長崎や他国の女性にとって、どれほど喜ばしく大切なことであるかでございます」、さらに「あなた様の名声が日本国中に伝わっていましたので、おイネはいつもオランダの学問について学ぶことができると考えているのでございます。けれども、嗚呼（嘆かわしかな）！彼女はすでに女性としての立ち振る舞いができていたのでございます。」とあり、それにも関わらず、オランダの学問まで学ぼうとは、本当に嘆かわしいことだと述べている。

また(2)の書簡では、父シーボルトの存在を誇りとし、父の名に恥じない人生を送ることを望み、「あなたはただの子ではありません。地球に美名をあらわす人の子としては、その心がなければ志はかなわぬことなので、露ほども父上の名を汚してはなりませんと、明けても暮れても教え諭した甲斐があって、月日が経つにつれ、^{れいり}伶俐⁴になっていくように見えるのはただの親心にすぎないのか疑っているのでございます、そのうちに17、18歳になると、常々、^{しせい}市井の人として世に長く生きるのを忌み嫌い、何としても父上の家業を継ぎ、天下晴れて立身出世して、父上様には孝の始めを欠いていますが、考の終わりを全うし、女ながらも一家を興し、名を末の世に残そうと^{せんしんぼんく}千辛万苦をものともせず、読書、医術に専心しておりました」として、母タキの働きかけが、娘イネの価値観に大きな影響を及ぼし、最終的に父シーボルトと同じ医学の道に進む動機の一因になっていることが分かる。この

4 かしこいこと。りこうなこと。

ことは宮坂氏の論文⁵にも詳しく紹介されている。なお、和文はタキ自身は使用しなかったといわれる漢字表記の「稲」などが使用されていることから、文面のような漢字カタカナ書きをタキ自身が書いたかどうか疑問だ。おそらくタキの口述をイネが代筆し作成したものである。現存するイネの書と比較検討すると、書体が酷似しているのではば間違いないであろう。

また「私の手紙は年々商館長を通じて10年来お送りしているのですが、いまだかつてあなた様の親しみを込められた手紙はございません。その間に、あなた様は別便で贈り物をしてくださいました」とある。1830年以降は、シーボルトから其扇・イネ宛の手紙は、今のところ見当たらない。その理由としては、おタキの再婚やシーボルトが日本研究に専念するもっとも多忙な時期であったことなどがあると考えている。

そのほか、(1)の手紙には、おタキの夫や母の死、門人鈴木周一の死などについても報告されている。夫和三郎（装飾職人）の死は「6年前に亡くなりました」との記述から1839年（天保10）と思われ、母は1845年4月に亡くなったと記してある。福井氏論文⁶によると、其扇の母きよ（イネの祖母）の皓台寺標文の戒名は“一鑑古明信女”（佐平妻きよ 弘化2年（1845）4月24日没 得年63歳）とあり、手紙に書かれている死亡の年月と一致する。蘭方医で本草学者の鈴木周一は、シーボルトにオランダ語の論文「日本貨幣小考」を提出しており、敬作と交流を持った人。同じくシーボルトの門人伊東昇^{しょうてき}進の日記に記載があり、その死亡年月も一致している。今回のおタキの手紙がいかに貴重なものかがわかる。

3) 三瀬周三の蘭文代筆「オタキサ？＝楠本タキの手紙」

蘭文の前半部分に注目すべき記述が見られる。それはおタキから見たシーボルト事件についての記述である。

「以前、私はあなた様の不慮の時代に大きな重圧を経験されたこと⁷を遅ればせながら聞きました。それについてあなた様は、もしかすると私共々、（それは）正しくないと願っていたと思っております。それにも関わらず、私は35年の間、胸の内に収めていたのですが、この手紙であなた様に少しでも私の心情をお知らせしたく書いたのでございます。それは故意に発生した以前の出来事が原因ですが、（このことで私は）涙が出るのでございます。」とあり、さらに「何故にあなた様と同じように正午に多数の役人たちが（来て）、あなた様の誠実な門人たちからすなわち二宮まで、そして最後に私を連れて行ったのでしょうか⁸！誰によって騒動⁹が引き起こされたのでしょうか？誰かそれについて、不快なことに抗議したのでしょうか？誰がどうやって誠実と奉仕の心で、それを終わらせたのでしょうか？」と書いている。

⁵ 宮坂正英 1999「ブランデンシュタイン家文書より発見された楠本タキ、イネ母子に関する断簡について」『鳴滝紀要』9、シーボルト記念館

⁶ 福井英俊 1991「楠本・米山家資料に見る楠本いねの足跡」『鳴滝紀要』創刊号、シーボルト記念館

⁷ シーボルト事件。

⁸ 1829年2月13日、其扇、奉行所にて尋問。このあと2回尋問。

⁹ 事件のこと。

これは、いわゆる“シーボルト事件”について、おタキが35年を経て初めてシーボルトにその心情を打ち明けたものである。宮坂氏論文¹⁰によると、長崎市シーボルト記念館が収集したマイクロフィルム資料の中に「シーボルト日記の抜粋」の原本が見つかったとしてシーボルト事件直後の1828年（文政11）12月16日から18日までの3日間の内容が掲載されている。そのなかで「忠実なマレー人オルソンと日本人女性オタクサ（妻タキ）に黙っておくことができず打ち明けた」とあり「日本の原資料のうち最も重要かつ不可欠な資料などを隠すのに、よく協力してくれた」と述べている。事件後、長崎奉行の取り調べを受けたおタキは、「何も知りません」と答えたとき、気骨のある女性として伝えられている。

しかし、ここで紹介したおタキの手紙から推察すると、シーボルトにただ言われるままに、禁制品であるかどうかも分からず、ひたすら隠す作業を手助けしたのではないかと考えている。おそらく、おタキは事件発生の状況をよく分からず、当時シーボルトと夫婦関係にあったということから、幕府はおタキが何らかの事情を知っているものとして、おタキを捕らえ尋問したのではないかと推察する。この記述は、これまで知られていない注目すべき箇所であると思う。

Ⅲ. まとめにかえて

以上、ブランデンシュタイン家所蔵資料の中から見つけたおタキの2つの手紙を通して、シーボルトが帰国した後のおタキとおイネ母子が、どのように生活し、またどのような心情をもっていたか、ここ“おイネゆかりの地”卯之町で、その一端を紹介させていただいた。今後ともおタキとおイネの母子関係について、新たな史料が発見されることを願っている。

¹⁰ 宮坂正英「ブランデンシュタイン家資料に見られるシーボルト事件に関する日記について」『鳴滝紀要』3、シーボルト記念館